故鈴木修学先生を懐う

浅賀　ふさ

新らしく創られようとする中部社会事業短期大学に来るようにと、私が御招きを受けた十年前の故鈴木修学先生は御健康そのものゝ如く、このように早い御別れが約束されていようと予想する余地の全くなかつた程御元気に充ち溢れて居られました。大学つくりの地かためも漸くこれからという時先生の御逝去にあい、関係するすべての人々の喪失感は言葉につくし難く、又先生御自身にとつても、営々積みあげられた仕事、組織及びそれらを支える多くの人々の生命と生活の要の頂点に居られて、未だ齢六十を出でず、この世を去られたことは御心残りの多いことと、御家族の御悲しみと共に深い哀悼の思いを捧げたいと思います。

＝初期の想出と私の大学との縁＝

名古屋に民間経営で社会事業教育の大学が創立されるから、社会事業知識と技術に関する適当な教師を探して欲しいと依頼を受けたのは昭和二十七年夏の終る頃でした。その時法音寺の仕事を伺つた私の先生の御事業の感想は、基督教々会と社会事業の結びつきのような根強いものに感心したもので、それは愛の宗教という点において両者の共通したものがそのような印象を私に与えたようですが、それとともにむしろ先生のおゝらかでエノジエティツクな御風貌が私に与えた印象であつたのではないかと思います。

私の知る鈴木先生の過去十年の中、御発病後の七年間を除いた初期の三年間に私の得た先生のイメージこそは真の鈴木先生の御姿であつたと私は今もまたいつまでも思いつゞけることだと思います。

その頃の先生の御考えは決して古い固定化したものではなく、社会事業が金と善意のみにて成立しないこと、科学性の導入によつて、施設で育てられる子ども達もひずみのない人間を育てる社会事業を行うことの出来る社会事業人の養成の必要性に深い御理解があつたようであります。このことは、文部省の意向もあつたといえ、学長問題に関しては実質的には社会事業の動機的裏付ともなるべき精神医学の我国における第一人者である村松常雄教授に協力を求められたことによつて雄弁に語られて居ります。

おだやかな童顔をもつて近よるすべての人々を春の日ざしのようなやさしいあたゝかさで包まれるのが最近の鈴木先生のすべてであつたように私達は印象づけられますが、御発病以前の先生には内面の力強い迫力が感ぜられました。これは先生の永い実践のきびしさを通して得られた心の鍛錬と自信からであつたことゝ信じます。五十代に身を切るような荒行三回に耐えられる精神力はその現われを見ることが出来ます。

若い時代の先生が自ら耕してつくられた上等米を決して自らの口に入れられなかつたことや、戦争によつて破れ去つた先生の台湾における雄大な計画―それは戦争さえなかつたら決して夢ではなかつた、すでに土地も購入されてあつたということである―等を知るに及び、人間鈴木修学の全人的アウトラインが浮んでまいります。このような背景のもとで、或時私に話された先生の言葉「金なんか、仕事をすればあとからついて来る」―私はその時日蓮上人のような気魄を先生に感じました―が決してつけ焼刃や偶然の放言でないことを理解することが出来ます。

このような先生の人格、もの解りのよさと村松教授の実質的学長としての御協力は、他に適当な人を探しあぐねた結果もあつて、私をこの大学の前身の創立当初から結びつけることになりました。

＝鈴木先生の教え＝

信徒五〇万の心をつなぐものは何であつたか。私は故鈴木上人のおしえをもう一度探し求めて見たいと思います。その説く処は日蓮の教え、真善美聖、大慈悲心、他の人の苦しみを慰め労り、幸福にする。大友愛心、助けあいの精神、釈尊の「我と等しくして異ることなからしめんと欲す」の精神、これは我大学の教学の精神として先生は高く掲げられています。妙法とはこの精神を日常生活に実践することである。そして先生は自ら説教の実践者でありました。先生の教えは誰れにも直ちに実践可能な最も理解され易い言葉と実例で解かれていて、あの温顔から流れ出る言葉は信者に肌で受けとめられていたにちがいないと思われます。純粋で真実な善良な人々を養うと同時にそうした信者の感謝や罪業焼滅が献金の形において社会事業の実践となつているのであります。

数多くの人々がこの教えによつて魂の救いを見出し、現世のいざこざの解決を見出していつたにちがいありません。一途に信ずる信者の鈴木上人えの信頼は基督とその弟子達の如く、病気の悩みさえ先生との接触を通して癒されるということは、サイコソマティツク症の患者例を通して私達には理解できることであります。

鈴木上人のこの宗教的精神衛生の方法と村松先生の医学的方法には、その共通した類似点と共に異つた独自性があるにちがいないと思いますが、これは興味あるテーマではないかと思います。

＝日本福祉大学の今后の方向＝

「我と等しくして異ることなからしめんと欲す」という釈尊の言葉をもつて鈴木元学長は、我日本福祉大学の教学の精神として高く掲げられました。この言葉を私達は吟味して見たいと思います。私はこの言葉を宗教的精神の表現と見ると同時に社会科学者の願いであるとも考えます。

社会事業を志す者にとつてこれは正にスタート・ラインではないかと考えます。社会事業の理論的根拠を「人間が人間として生き、成長し、社会参加をするため」の個人的社会的努力に求めるならば、この言葉の意味を客観化し、科学化し、且つ組織化して社会福祉の骨子として行くことが極めて自然にできるのではないかと思います。

所得の格差、貧困者の生活窮乏や医療費等の欠乏、基礎的必要さえ充されない児童、環境の著しい劣悪等を釈尊の眼で私達は眺めるならば、大慈悲心に相当する社会的施策の必要を痛感致します。専門社会事業の営みには、鈴木先生の掲げられた教学の精神を動機として、これに加ふるに人間と人間の社会に関する諸科学の叡智の光をもつて、その方向や方法を誤まらないで、より有効な解決や予防の努力をしてまいらねばなりません。

近時人間に関する諸科学はその身体領域においても、精神領域においても、社会的領域においても、又それらの相関々係においても著しい発見と進歩があり、且つては解決不可能で、運命とあきらめて、最後のより処を宗教に求めた問題が、現在は変つて来ました。

抗生物質その他の新しい発見が人間の寿命を延長させたり、且つては恐怖と絶望をもつて考えられた精神障害者の多くの者が、現在は社会復帰して正常又は正常に近い生活をとり戻すことができるようになりました。

非行少年や性格破綻者の形成過程も徐々に明らかにされて、予防の道が開かれるにちがいないと私は信じて居ます。

この意味において我等の先輩である故学長が掲げられた烽火の光を見失うことなく、私達は社会福祉の学問と臨床を地道に着実に研究して、一人でも多くのよい実践者と研究者を社会福祉機関のみならず、あらゆる社会の部面に送り込んで、日本の社会の向上に役立つて貰い度いと願うもので、これが故学長の御意志に最も忠実に活かす道であろうと信ずるものであります。

（ケースワーク研究室　教授）